校内別室について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校３年生であり、中学校１年生の２学期から登校しぶりが始まり、以後不登校状態となった。できない自分を見せたくないという気持ちから精神的に不安定な状態になり、登校できなくなった。２年生から校内別室を利用しており、現在は、校内別室を活用しながら、在籍学級で授業を受けることができるようになった。

具体的な取組

○校内別室の常時開室

校内別室は、通常の教室となるべく離れた場所に設置し、生徒の動線が異なるようにした。また、校内別室指導支援員や教員を常時配置し、登校した生徒にいつでも対応できるようにした。

○自分がしたいこと、できることをして過ごす

個別の学習スペースを設置し、自分が取り組みたい学習を自分のペースでできるようにした。また、小集団でゲームをしたり、校内別室指導支援員と話をしたりして過ごす時間を設定した。

○面談による目標の確認

在籍学級の担任や授業担当の教員と随時面談を行い、生徒がスモールステップで学習に取り組めることを確認した。授業だけでなく、行事などを通して、在籍学級の復帰を望む生徒が何に取り組むのかについて、その在籍学級の担任と一緒に計画を立てた。

○サポートの充実

在籍学級の担任をはじめとする教員や、校内別室指導支援員、家庭と子供の支援員、学習支援員、ＳＣ等、様々な立場の人からの声かけにより、気持ちの面でのサポートを行い、できないことを受け入れ、できることを伸ばしていけるような支援を行った。

成果

中学校１年生の時には 70 日ほどあった欠席が、校内別室に通うことで、中学校２年生の時には、20 日未満まで減少した。また、様々な支援によって、心に余裕ができ、中学校３年生の半年間で欠席が２日となり、在籍学級の教室で過ごすことが増えている。

課題

支援員等の人数を確保するとともに、教員が声かけを続けることができる学校組織としての関わりを継続させることが必要である。

生徒の意思を尊重した不登校支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校１年生のときには通常どおり登校していたが、２年生に進級すると欠席が目立つようになり、不登校状態になった。保護者は当該生徒の意思を尊重しつつも登校できるようになってほしいと考えており、関係諸機関の利用も検討している。

具体的な取組

○校内支援委員会を核とした組織的運営

毎週金曜日に、管理職・特支コーディネーター・学年担当・ＳＣ・ＳＳＷ・支援員等での情報共有及び支援の検討・決定を行い、全教職員の共通理解の下、組織的な対応を行った。

○ＳＣ面談を踏まえた支援方針の検討

当該生徒及び保護者とＳＣとの面談を行い、生徒の不安な気持ちや状況を踏まえた支援方法を検討した。

生徒の状態に応じた登校を可能とし、在籍学級の担任や学年教員、校内別室指導支援員が連携した学習支援を行った。

○関係教職員との即時的な情報共有

利用カードを活用し、校内別室での状況をその日のうちに支援員→管理職→担任→養護教諭で共有した。また、校内別室指導支援員間においても本カードを活用し、引継ぎを行った。

○校内別室からの授業へのオンライン参加

校内別室に登校している生徒は、校内別室指導支援員と相談して自分で一日の計画を決めているが、生徒が希望する場合、校内別室でオンライン授業を受けることも可能とした。校内別室指導支援員が授業担当教員と連携し、端末の設定や資料の受け渡し等の調整を行った。

成果

当該生徒は、学校を欠席し始めた当初は、無理をして在籍学級の教室に入るか欠席をするかであったが、校内別室への登校を開始してからは、週３、４日のペースで登校することができるようになった。

課題

校内別室による「学校復帰」は進んでいるが、「在籍学級への復帰」のハードルは依然として高いこと。

校内別室を利用した不登校支援について

不登校児童の状況

対象児童は、不登校になる以前から、登校に対する課題や学校での人間関係づくりに困難さが見られ、特別支援教室を利用していた。友達とのトラブルをきっかけに登校できなくなり、不登校となった。

具体的な取組

○リモートによる校内別室の周知

当該児童や保護者と相談の上、在籍学級の担任が定期的にリモートで当該児童との交流を図った。その際、校内別室について紹介し、利用できることを伝えることで、在籍学級の教室に行かなくても校内に居場所がある安心感を醸成した。

○登校時に校内別室を案内

特別支援教室への通室の際、実際に校内別室を見学する機会を設けることで、利用するイメージがもてるようにした。また、校内別室の中でできることを紹介し、安心して利用ができるよう意識付けすることで、利用を促すことができた。

○実際に校内別室を利用する

当該児童が校内別室を利用することで、在籍学級の教室に入れなくても登校することができた。また、在籍学級の教室ではなく、校内別室に通う児童がいることを、在籍学級の友達にも知らせ、在籍学級の友達とのつながりをもてるようにした。

○在籍学級の教室復帰

当該児童が在籍学級の教室に行くことを希望した際、校内別室をきっかけとして在籍学級の教室に向かうことができた。校内別室にいつでも戻ることができる安心感をもてるよう児童の様子を見守った。

成果

当該児童は、昨年度、１日も登校できなかったが、今年度、出席率が 77%まで回復した。

これにより、校内別室があることで、登校への負担感が軽減され、登校を促す効果があることが分かった。

課題

不登校の理由は様々であり、個別の状況に応じた支援の在り方を構築していく必要がある。

ＳＣと校内別室との連携について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校２年生で、５月の連休明けから学校に登校できなくなっている。自宅で一日中、ゲームをして過ごしていることがほとんどであった。月に数日、放課後に学校へ来て、ＳＣと話したり、在籍学級の担任と図画工作科の作品作りをしたり、ミニトマトの世話をしたりしている。

具体的な取組

○ＳＣと登校別室指導支援員との連携

当該児童は、ＳＣとのみ関わることができていた。

ＳＣが、カウンセリングルームに校内別室指導支援員を招いて当該児童と一緒に過ごしたり、話したり、遊んだりする機会を設けた。当該児童が安心して校内別室指導支援員と話ができる関係を築けるようにした。

○明るい校内別室環境整備

当該児童がより安心して過ごせるような校内別室の環境を整備した。照明をより明るくするとともに、周りの児童の声や歩く音などが聞こえにくい場所を準備した。

○スモールステップの学習支援

当該児童は、長期間学校の授業に参加しておらず、学習に対して抵抗感を感じていたことから、理科の実験キットを校内別室指導支援員と一緒に組み立てて、実験を行うようにした。また、学習に取り組みやすくするため、英語パズルなどを用いて学習に導くような工夫をした。

○教室復帰への始めの一歩となる支援

放課後のみ登校して、ＳＣと話すだけであったが、教室復帰の始めの一歩として、通常の授業の時間に登校して、校内別室で過ごし、規則正しい生活習慣を培うとともに、校内別室指導支援員と一緒に、廊下を歩く等の取組を行った。

成果

今年度からＳＣと校内別室指導支援員との連携が図れるようになって、当該児童の登校に対する安心感が増した。このことから、週１日、通常の授業を行っている時間にも校内別室に登校することができるようになり、出席率が、４%から 20%に上昇した。

課題

在籍学級の児童との交流や部分的な授業参加等、更に安心して登校ができるよう支援していくことである。

校内別室を利用し登校できるようになったケースについて

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校入学当初から、保護者との分離が難しく泣きながら登校しており、学期を経るごとに欠席が多くなった。保護者は、当該生徒の気持ちを受容し、登校を嫌がる様子がある時には無理に登校させなかった。

具体的な取組

○校内別室の活用

まずは、家から出ることを目標にした。保護者と一緒に

① 校内別室の見学

② 校内別室指導支援員との顔合わせ

③ 一日 30 分からの登校を目指した。

○在籍学級との関わりの維持

毎日登校できるようになってきたら、校内別室で給食を食べてみることにした。当該生徒の給食は、在籍学級の教室に配膳されるため、校内別室指導支援員が付き添って給食を教室に取りに行き、食べ終わったら食器を教室に片付けに行くことを続けた。

○学習への参加

校内別室において、過ごす時間が増えてきたところで、専科教員が声をかけるようにした。

専科教員が、校内別室でできる内容を準備し、取り組めるようにするとともに、児童が専科教室へ行き、授業に参加できるようにした。

○ＳＣと保護者との面談

学期初めと学期末に、ＳＣと保護者との面談を行い、担任、校内別室指導支援員も同席した。

校内別室や在籍学級における生徒の様子を保護者に伝え、今後の支援の方向を考えた。

成果

スモールステップで目標を設定することで、登校できるようになり、学校で過ごす時間が増えた。

校内別室への登校を開始してから、約１年半で、一人で登校して一日を学校で過ごし、下校することができるようになった。

課題

当該生徒の困り感を明らかにするために自治体の教育相談とも連携していく。

複数の教科での教室復帰を実現する。

ＳＣと校内別室との連携について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校２年生の５月の連休明けから学校に登校できなくなった。一日中、自宅でゲームをして過ごしている日々がほとんどであった。月に数日、放課後に学校へ来て、ＳＣと話したり、担任と図画工作科の作品作りをしたり、ミニトマトの世話をしたりしている。

具体的な取組

○ＳＣと登校別室指導支援員との連携

当該児童は、ＳＣのみ関わることができていた。

ＳＣが、カウンセリングルームに校内別室指導支援員を招いて当該児童と一緒に過ごしたり、話したり、遊んだりする機会を設けた。当該児童が安心して校内別室指導支援員と話ができる関係を築けるようにした。

○明るい校内別室環境整備

当該児童がより安心して過ごせるような校内登校支援教室の環境を整備した。照明をより明るくするとともに、周りの児童の声や歩く音などが聞こえにくい場所を準備した。

○スモールステップの学習支援

学校の授業に参加しておらず、学習に対して抵抗感を感じていたことから、理科の実験キットを校内別室指導支援員と一緒に組み立てて、実験を行うようにした。他にも学習に取り組みやすくするため、英語パズルなどを用いて学習への支援を工夫した。

○教室復帰への始めの一歩となる支援

放課後のみ学校に来て、スクールカウンセラーと話すだけであったが、教室復帰の始めの一歩として、通常の授業の時間に学校に登校して、別室で過ごし、規則正しい生活習慣を培うとともに、校内別室指導支援員と一緒に、廊下を歩く等の取組を行った。

成果

昨年度までは、放課後のみ登校していたが、今年度からＳＣと校内別室指導支援員との連携が図れるようになって、より登校に対する安心感が増して、週１日、通常の授業を行っている時間にも校内別室に登校することができるようになった。出席率が、４％から 20%に上昇した。

課題

在籍学級の児童との交流や部分的な授業参加等、登校が増えるよう支援していくことが必要である。

個に適した居場所づくりについて

不登校児童の状況

対象児童は、クラスでの人間関係が原因で、小学校３年生の時から不登校となった。同時期に家庭の状況も変わった。当該児童は、フリースクールへ通っている。

具体的な取組

○安心できる居場所作り

当該児童から、「学校に嫌な思い出が多く、同学年の人とは会いたくない。」との訴えがあったため、校内別室内をパーティションで区切り、他の児童と会わないようにして過ごすことにした。

周りを気にせずに過ごせる空間を作った結果、安心して登校できるようになった。

○学習習慣の定着

当該児童の希望に沿った学習課題に取り組ませるようにした。まず、学習習慣を定着させることを目的として、計算・漢字練習を中心に取り組めるようにした。取り組んだ課題に対しては、担任から児童にフィードバックを行った。

○校内での情報共有

支援員は、当該児童が、校内別室指導支援員や校内別室に通っている他の児童と話した内容などの詳細を毎日記録し、担任、分掌主任、管理職に回覧して情報共有をした。情報共有の結果、児童の希望や不安に対して、担任や管理職が保護者と連携して、児童の登校支援に対応することができた。

○校内別室内の段階的な人間関係づくり

当該児童と校内別室指導支援員との関係づくりを行い、その後に当該児童の様子を見ながら、他の児童との個別の関わりや小グループでの活動など、段階的に人間関係づくりを行った。

成果

フリースクールと連携することで、校内別室に週１～３日間登校できるようになった。校内別室指導支援員や別室利用児童とも良好な関係性を築いている。自ら活動を提案して取り組む姿も見られ、積極的に学習する様子が見られるようになった。

課題

在籍の図画工作科・家庭科・体育科等の学習から参加を促す等の工夫をし、学校生活への関心を高めていくことが課題である。

校内登校支援教室の取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校４年生から登校しぶりが見られ、保健室に登校していたが、一人１台端末を活用したタイピング学習を進めると、翌日から、数日間欠席してしまうほど、学習に抵抗感が見られた。様々なことへの不安が強く、友人の優しさもプレッシャーになる場合がある。

具体的な取組

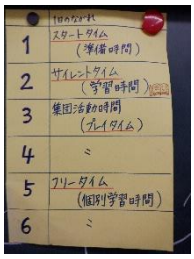
○教室環境の工夫

当該生徒が安心して過ごせるよう、校内登校支援教室内にソファーを置き、歓談できるスペースを設けた。

他の利用生徒とも関わりをもち、カフェコーナー作りに取り組んだ。パーティションなどで仕切った個別に静かに過ごせる場でも過ごすことができた。

○時間の工夫

校内別室における一日の時間割を作り、学習に取り組む時間や自分の好きなことに取り組める時間など、一日の中でメリハリをもって過ごせるようにした。



異学年の生徒と同じ時間に学習に取り組むことで、讃え合う姿も見られた。

○校内及び保護者との連携

「別室記録簿」を作成し、毎日いつ来室したのか、取り組んだ内容や様子を管理職、特別支援教育コーディネーター、養護教諭などで情報を共有した。また、気になることは担任と共有し、保護者にも連絡した。

○在籍学級との交流

面会場所を作り、校内別室から出ることが難しい場合でも、友達と会えるようにした。給食を在籍学級の教室に取りに行ったり、給食を在籍学級で食べたりするなど、授業時間外での交流も見られた。

成果

週１～３日程度、在籍学級の教室以外の場所に登校していたが、校内別室を開室し、居場所を確保することができた結果、週４～５日登校できるようになった。また、校内別室内で異学年の生徒と交流したことで、学習に自分から取り組むことができるようになった。

課題

校内別室指導支援員の研修等により、支援員の資質を向上していくことが必要である。

不登校生徒の居場所支援と学習等支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校２年生から不登校であったが、校内別室に継続的に週２日登校できるようになった。給食の時間に、在籍学級の友人とコミュニケーションを取る機会を設け、中学校２年生の３学期から、在籍学級の教室に登校することができるようになった。中学校３年生の運動会前に不安を訴えたため、校内別室の利用を勧め、生徒自身が利用時間を調整しながら、在籍学級の教室に登校することができている。

具体的な取組

○校内別室①（毎週水・金 10：30～12：30）

学年全員が入る広さの食堂で開室した。広い窓からは公園の木々が見え、外にも出られ、畑スペースも隣接していて開放感がある。自分の座りたい席に座るので、他の生徒と接触をすることが苦手な生徒も安心して利用することができた。

○活動内容を自己決定する

校内別室では、生徒が自習や読書など、自分で活動を決めて過ごせるようにした。開室時間中には、校内別室指導支援員とスクールカウンセラーインターンが常駐し、生徒の話を聞いたり、一緒に活動したりして関わりをもつようにした。また、複数の生徒同士で活動し、コミュニケーションを図る時間も設けた。

○校内別室②（毎日９：00～授業時間終了まで）

校内別室②には、個別の学習ブースを設置している。校内別室指導支援員が常駐し、生徒は授業や教室参加への不安などから自分で選択して来室し、自主学習に取り組んだり、校内別室指導支援員や他の生徒と話をしたりするなどして活用した。

○校務支援システムを活用した情報共有

閉室後、校内別室指導支援員が必要な情報を在籍学級の担任や学年教職員、養護教諭、ＳＣへ共有し、その日の報告を校務支援システムを使って全教職員に行った。

成果

当該生徒は、昨年度までは、居場所支援の校内別室に週２日登校することができていた。今年度からは常時開室したことで、学校生活において精神的に不安定になったときなどに利用できるようになり、在籍学級の教室に毎日登校することができるようになった。

課題

利用する生徒の状況から個別対応が必要なときがあるため、丁寧に生徒に対応ができるよう、更なる人員の確保が課題である。

安心できる校内別室での取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、苦手な教科や活動を理由に、朝は気持ちが不安定になり、学校に行くことを渋ることがある。登校はできるが、朝は校内別室で過ごし、気持ちを落ち着かせてから教室で過ごしている。

具体的な取組

○校内別室の設置

多くの教職員が不登校生徒を見守ることができるように職員室の近くに校内別室を設置した。校内別室指導支援員が常駐しており利用生徒に声をかけることで安心して過ごせる場をつくった。

○個人ファイルの作成

生徒が校内別室で過ごした時間の活動内容や様子を校内別室指導支援員が記録をして、校内別室指導支援員と担任が情報共有できるようにした。

利用生徒への配慮として、個人ファイルの外には生徒の名前を記載せず学年ごとに異なる色のシールと出席番号を書くようにした。

○個別学習の時間の設定

校内別室と在籍学級の教室とをオンラインでつなぎ、オンラインでの授業参加や担任が出す課題に取り組めるようにした。課題が終わった後は、一人１台端末を活用してドリルを進める、タイピングをする、読書をする、塗り絵をする等の活動から、自分で活動を選択して過ごせるようにした。

○あのねカードの活用

心配なことや不安なことを言葉で伝えるのが難しいときは、「あのねカード」を使って伝えられるようにした。

校内別室指導支援員が生徒に声かけをした生徒の気持ちを代弁したりして、児童が気持ちを整理しながらカードを書き、担任に困り感を伝えられるようにした。

成果

校内別室を活用することで、生徒が自分の気持ちを整理し、気持ちを切り替えてから教室で過ごせるようになった。

校内別室を利用することで昨年度と今年度で欠席日数が４日減り、登校日数を増やせた。

課題

校内別室指導支援員が不在の時間の居場所が保健室になるため環境整備が必要である。

校内別室の取組について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校４年生から登校しぶりが見られ、保健室に登校していたが、一人１台端末を活用したタイピング学習を進めると、翌日から、数日間欠席してしまう程、学習に抵抗感が見られた。対象児童は、不安が強く、友人の優しさもプレッシャーになる傾向がある。

具体的な取組

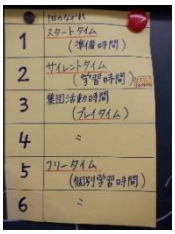
○教室環境の工夫

児童が安心して過ごせるよう、校内別室内にソファーを置き、歓談できるスペースを設けた。

他の利用児童とも関わりをもち、カフェのようなコーナー作りに取り組んだ。パーティションなどで仕切った個別に静かに過ごせる場でも過ごすことができた。

○時間の工夫

校内別室における一日の時間割を作り、学習に取り組む時間や自分の好きな事に取り組める時間など、一日の中でメリハリをもって過ごせるようにした。異学年の児童と同じ時間に学習に取り組むことで、異学年で教え合う姿も見られた。



○校内及び保護者との連携

支援員が「別室記録簿」を作成し、毎日いつ来室したのか、どんな事に取り組んだのか、どんな様子だったのかを管理職、特別支援教育コーディネーター、養護教諭などで情報を共有した。また、気になることがあれば、担任と共有し、保護者にも連絡した。

○在籍学級との交流

面会場所を作り、校内別室から出ることが難しい場合でも、友達と会えるようにした。

給食を在籍学級の教室に取りに行ったり、給食だけ在籍学級で食べたりするなど、授業時間外での交流も見られた。

成果

週１～３日程度、在籍学級の教室以外の場所に登校していたが、校内別室を開室し、居場所を確保することができた結果、週４、５日登校できるようになった。また、校内別室内で異学年と交流したことで、上級生から刺激を受け、学習に自分で向かうことができるようになった。

課題

別室を利用する児童の個に応じた支援を充実させるため、校内別室指導支援員の研修の機会を確保すること。